

# ビデオ評価による動作動詞の日中対照研究

## ——“拿”と「持つ」、「取る」——

中 司 梢

### 1. はじめに

本稿では、手に関わる動作動詞の日中対照研究の一環として、中國語動詞“拿”と、多くの場合辭書などでその譯語としてあてられている日本語動詞「持つ」および「取る」を比較する。

筆者は日中兩言語の手に関わる動作動詞の意味を比較するにあたり、基本的な動作—「取る」、「保つ」、「離す」—を表す動詞から着手することにした。そして、中司 2017では物を「取る」動作を表す動詞の一例として“拿”と「持つ」、「取る」を取り上げた。動作動詞の意味を考察するには動詞が表す動作を目で見て観察することが有効であると考え、複数の中國語母語話者および日本語母語話者に調査を行い、中國語母語話者には“拿”、日本語母語話者には「持つ」「取る」という文字を見せて、それが表す動作を身體を用いて表現してもらった。

また、中司 2019は“拿”の中心的意味および周邊的意味を検討するにあたり、複数の中國語母語話者に調査を行い、“拿”に関する様々な動作のビデオを見せ、より“拿”らしいものはどれか評價するよう求めた。

本稿では、中心的意味および周邊的意味という観点から“拿”、「持つ」、「取る」を比較するために、中司 2019で“拿”について行ったものと同様にビデオを用いた調査を日本語動詞「持つ」、「取る」について行う。そして、その結果を“拿”と比較する。ビデオを用いた手法によって動詞が表す動作の形を明らかにすることで動詞の意味を明確にし、異なる言語間で比較することが可能になると考えられる。

なお、“拿”についても中司 2019と同じ調査を別のインフォーマントに行っ

た。これは、データの数を増やし、中司 2019の調査結果の信頼性を検討するためである。

## 2. 調査方法

本稿の調査方法は中司 2019と同様であるため、ここでの説明はそれと重複する。調査は2018年8月～9月、2019年9月、2020年7月～8月、2021年7月にインターネット上で実施した。“拿”についてのインフォーマントは中國語母語話者34名（そのうち19名は中司 2019のインフォーマント）<sup>1)</sup>、「持つ」、「取る」についてのインフォーマントは日本語母語話者34名である<sup>2)</sup>。

いずれの動詞の調査においても、インフォーマントは「1. 引き寄せ」、「2. 持ち上げ」、「3. 保持」、「4. 引き寄せ+移動」の4種類のビデオを見て、よりその動詞らしいビデオはどれか評価することが求められた。（圖1～圖4）。

圖1 「引き寄せ」のビデオより



「引き寄せ」のビデオは物體を手中に収めたのち、自分の方向へ引き寄せる動作で、取得義に相當する。

圖2 「持ち上げ」のビデオより



「持ち上げ」のビデオは物體を手中に収めたのち、持ち上げる動作で、「引き寄せ」と同様に取得義に相當する。ただし「引き寄せ」は腕が主體の方向に動くが、「持ち上げ」は腕が上方方向に動き、自分の方向にということに關わらず物體を手にする動作である。

圖3 「保持」のビデオより



「保持」のビデオは物體を持っている状態で、保持義に相當する。

圖4 「引き寄せ+移動」のビデオより



「引き寄せ+移動」のビデオは、物體を手中に收め、自分の方向へ引き寄せた後、主體がその場から移動する動作であり、移動義に相當する。これは、「引き寄せ」のビデオに移動の要素が加わったものである<sup>3)</sup>。

なお、本調査ではどのような物體を“拿”するか、「持つ」か、「取る」かが、インフォーマントの評価に與える影響を考慮し、同様の動作について大きさの異なる3つの物體（大・中・小）を使用したビデオを作製した（圖5）。また物體は一目見ただけではそれが何であるか分かりにくいものを使用した<sup>4)</sup>。

圖5 調査で使した3つの物體  
（左から大・中・小）



圖6は調査畫面の一例である。調査では、インフォーマントが評価しやすいように4つのビデオを同時に提示するのではなく、ビデオを2つずつ提示した。そして、“拿”についての調査では、どちらのビデオがより“拿”らしいか、“普通话”（中國語の標準語）の基準に即して判断するように求めた。「持

つ、「取る」についての調査ではどちらのビデオがよりその動詞らしいか評価するよう求めた。なお、比較する2つのビデオの「らしさ」が同程度であると判断した場合は「?」を選択するよう求めた。

圖6 調査画面の一例



インフォーマントに示された指示文は以下の通りである。

“拿”の調査において中国語母語話者に示された指示文：

比较以下两个有关汉语动词“拿”的录像，请您判断哪个录像更像“拿”。如果认为录像A更像“拿”，请选择“A”；如果认为录像B更像“拿”，请选择“B”；如果认为无法判断（也就是说两个录像都差不多），请选择(?)。

（日本語譯：中國語動詞“拿”に關する以下の2つのビデオを比較し、どちらのビデオがより“拿”らしいか判断してください。ビデオAがより“拿”らしいと判断した場合は、「A」を選択してください。ビデオBがより“拿”らしいと判断した場合は、「B」を選択してください。判断できない（すなわち、2つのビデオは同じくらいである）場合は、「?」を選択してください。）

「持つ」の調査において日本語母語話者に示された指示文<sup>5)</sup>：

日本語動詞「持つ」に關する以下の2つのビデオを比較し、どちらのビデオがより「持つ」らしいか判断してください。ビデオAがより「持つ」らしいと判断した場合は、「A」を選択してください。ビデオBがより「持つ」らしいと判断した場合は、「B」を選択してください。判断できない（すなわち、2つのビデオは同じくらいである）場合は、「?」を選択してください。

課題は、大中小の物體それぞれについて4つの動作を比較したものであり、大きさの異なる物體を使用したビデオ同士を比較することはない。そのため課題の種類は、物體3サイズ×組み合わせ6パターン<sup>6)</sup>で、計18種類である。さらに、調査の信頼性を高めるため、各インフォーマントに同じ課題を3回ずつ提示した。その結果、各調査において一人のインフォーマントに課せられた課題の合計数は、18種類×3回で計54課題である。

提示される課題の順序はインフォーマント毎にランダム化した。さらに、画面上の各ビデオの位置（右と左のどちらに表示されるか）もランダム化した。

### 3. 分析方法

本調査では、どのような物體を“拿”するか、「持つ」か、「取る」かが評価へ及ぼす影響を考慮し、各々のビデオについて大きさの異なる3つの物體を使用したビデオを作製した。そして、分析する際はこれらの物體の大きさの違いは無視して、ビデオを「1. 引き寄せ」、「2. 持ち上げ」、「3. 保持」、「4. 引き寄せ+移動」の4種類として扱う<sup>7)</sup>。

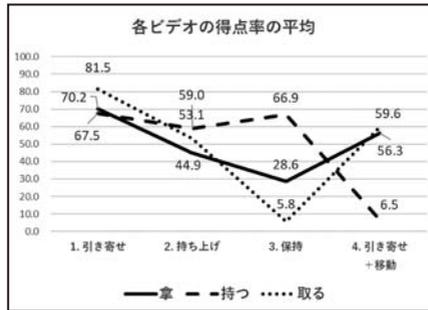
インフォーマントがよりその動詞らしいと評価したビデオを2点、選ばれなかったビデオを0点、どちらのビデオも同程度であると評価した場合は各1点とした。4つのビデオはそれぞれの調査において1名のインフォーマントに対して各々27課題に提示されたため、インフォーマント毎の各ビデオの最高点は54点、最低点は0点である。

## 4. 結果と考察

### 4.1 各ビデオの得点率の平均

グラフ1は“拿”、「持つ」、「取る」の調査における各ビデオの得点率の平均である（それぞれインフォーマントは34名）。ここでいう得点率とは、各ビデオの最高点54点を100%とし、点数をパーセンテージに換算したものである。

グラフ1 各ビデオの得点率の平均  
 (最高100%、最低0%)



グラフの横軸が「1. 引き寄せ」、「2. 持ち上げ」、「3. 保持」、「4. 引き寄せ+移動」の各ビデオを表し、縦軸がその得点率を表す。実線が“拿”、太い点線が「持つ」、細かい点線が「取る」についての分析結果である。

“拿”は「引き寄せ」のビデオの得点率が最も高く、70.2%（平均点は54点満点中38点）であった。次に、「引き寄せ」のビデオからはやや下がって、「引き寄せ+移動」のビデオの得点率が56.3%（平均点30点）、そこからさらに下がって「持ち上げ」のビデオの得点率が44.9%（平均点24点）で続く。「保持」のビデオの得点率は28.6%（平均点15点）で、ほかに比べて明らかに低かった。

なお、インフォーマントの数が少なかった中司 2019の調査結果を本調査結果と比べてみてもほとんど差はなかった<sup>8)</sup>。ここから、中司 2019の調査結果は信頼に足ると言えよう<sup>9)</sup>。

「持つ」についての各ビデオの得点率は、「引き寄せ」67.5%（平均点36点）と「保持」66.9%（平均点36点）がほぼ同率で並び、そこから若干下がって「持ち上げ」59.0%（平均点32点）が続く。これらに対し、「引き寄せ+移動」のビデオは得点率が6.5%（平均点4点）で、ほとんど選ばれなかった。

「取る」については、「引き寄せ」のビデオの得点率が81.5%（平均点44点）で突出して高かった。そこからかなり下がって「引き寄せ+移動」のビデオが59.6%（平均点32点）、「持ち上げ」のビデオが53.1%（平均点29点）であった。「保持」のビデオの得点率は5.8%（平均点3点）で、ゼロに近い数値であった。

“拿”、「持つ」、「取る」についての結果を比較すると、一見してわかるのは

“拿”と「取る」が似ているということである。両者は「引き寄せ」のビデオの得点率が最も高く、それに「引き寄せ+移動」のビデオと「持ち上げ」のビデオが続き、「保持」のビデオの得点率が最も低い。ただし、「保持」のビデオの得点率は、「取る」においてはゼロに近いのに対し、“拿”においてはそこまでは低くなかった点で両者は異なる。

一方、「持つ」の結果は、「引き寄せ」のビデオの得点率が高い点で“拿”および「取る」と共通する。しかし、「持つ」においては「保持」のビデオの得点率も「引き寄せ」のビデオと同率で高かった点で異なる。また、「持つ」においては「引き寄せ+移動」のビデオの得点率がゼロに近く低かった点でも“拿”および「取る」とは異なる。さらに、「持つ」における「持ち上げ」のビデオの得点率は“拿”や「取る」ほどの下がり具合ではなかった。

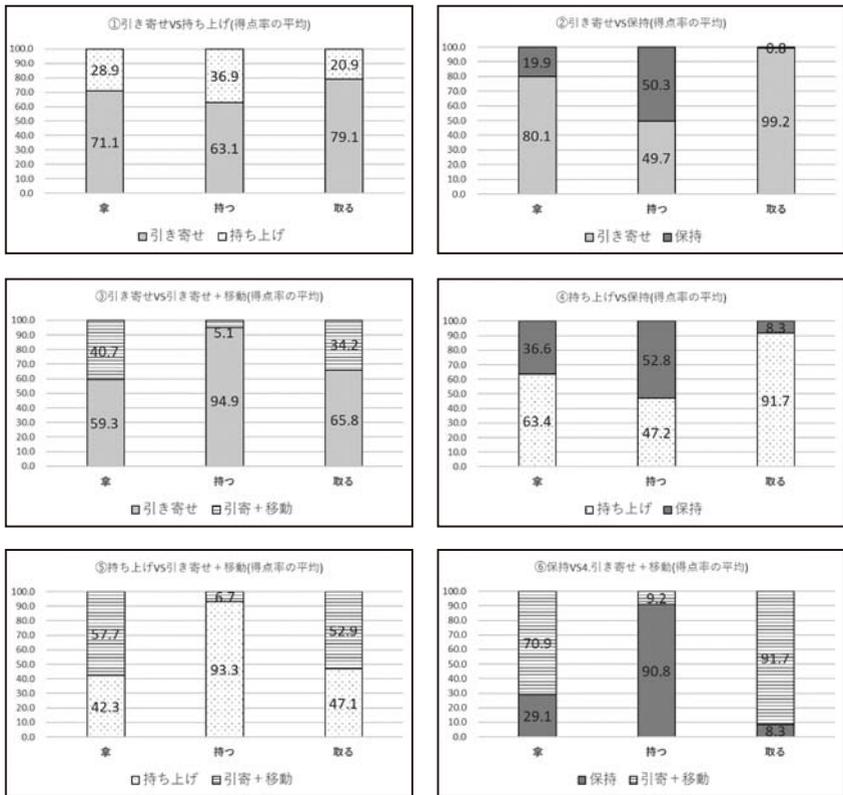
#### 4.2 組み合わせ別ビデオの得点率の平均

「2. 調査方法」で述べたように、本調査ではインフォーマントに、よりその動詞らしいビデオはどれか評価してもらうにあたって4つのビデオを同時に提示するのではなく、2つずつビデオを提示するという方法を取った。2つのビデオの組み合わせは以下の計6種類である。

- ① 「引き寄せ」と「持ち上げ」のビデオの比較
- ② 「引き寄せ」と「保持」のビデオの比較
- ③ 「引き寄せ」と「引き寄せ+移動」のビデオの比較
- ④ 「持ち上げ」と「保持」のビデオの比較
- ⑤ 「持ち上げ」と「引き寄せ+移動」のビデオの比較
- ⑥ 「保持」と「引き寄せ+移動」のビデオの比較

グラフ2は2つのビデオの組み合わせ別の得点率の平均を表す。縦棒グラフは左から“拿”、「持つ」、「取る」についての結果を示す。例えば、①「引き寄せ」VS「持ち上げ」（得点率の平均）のグラフは、「引き寄せ」と「持ち上げ」の2つのビデオを比較する課題の得点率の平均を表している。グラフ1では全体における各ビデオの得点率の平均を見たが、このグラフ2は本調査の、より直接的な結果を示している。

グラフ2 組み合わせ別ビデオの得点率の平均  
(最高100%、最低0%)



「引き寄せ」と「持ち上げ」の2つのビデオを比較した際の結果(①)を見ると、「拿」は71.1%：28.9%、「持つ」は63.1%：36.9%、「取る」は79.1%：20.9%であった。いずれの動詞においても「引き寄せ」のビデオの得点率が高い点で共通するものの、「持ち上げ」との得点率の差は「取る」、「拿」、「持つ」の順に小さくなっている。

「引き寄せ」と「保持」の2つのビデオを比較した際の結果(②)を見ると、「拿」は80.1%：19.9%、「持つ」は49.7%：50.3%、「取る」は99.2%：0.8%で、各動詞は異なる傾向を見せている。「拿」は「引き寄せ」のビデオの得点率が圧倒的に高いものの、「保持」のビデオが選ばれなかったわけではない。「持

つ」については「引き寄せ」と「保持」のビデオの得点率がほぼ同率であった。「取る」については「保持」のビデオは選ばれなかった。

「引き寄せ」と「引き寄せ+移動」の2つのビデオを比較した際の結果(③)を見ると、「拿」は59.3%：40.7%、「持つ」は94.9%：5.1%、「取る」は65.8%：34.2%であった。「拿」と「取る」は「引き寄せ」のビデオの得点率のほうが高いものの、「引き寄せ+移動」のビデオも一定程度選ばれている。一方、「持つ」については「引き寄せ+移動」のビデオはほとんど選ばれておらず、「拿」と「取る」とは異なる傾向を見せている。

「持ち上げ」と「保持」の2つのビデオを比較した際の結果(④)を見ると、「拿」は63.4%：36.6%、「持つ」は47.2%：52.8%、「取る」は91.7%：8.3%であった。この結果は「引き寄せ」と「保持」のビデオの比較結果と類似するが、「拿」については「持ち上げ」と「保持」のビデオを比較した場合のほうが得点率の差が小さい。

「持ち上げ」と「引き寄せ+移動」の2つのビデオを比較した際の結果(⑤)を見ると、「拿」は42.3%：57.7%、「持つ」は93.3%：6.7%、「取る」は47.1%：52.9%であった。「拿」については「引き寄せ+移動」のビデオが「持ち上げ」のビデオより得点率が高いものの大きな差があるとまでは言えず、「取る」についてはほぼ同率であった。一方、「持つ」については移動の要素を含む「引き寄せ+移動」のビデオはやはり殆ど選ばれていない。

「保持」と「引き寄せ+移動」の2つのビデオを比較した際の結果(⑥)を見ると、「拿」は29.1%：70.9%、「持つ」は90.8%：9.2%、「取る」は8.3%：91.7%であった。「拿」と「取る」については「引き寄せ+移動」のビデオのほうが得点率が高いが、「拿」は「保持」のビデオも一定程度選ばれているのに對し、「取る」は「保持」のビデオは殆ど選ばれていない。「持つ」については「引き寄せ+移動」のビデオの得点率は低い。

これらの結果を単純に総合すると、4つのビデオの各動詞らしさは以下の順になり、先に見た全体における得点率の平均(グラフ1)の結果とも矛盾しない。

「拿」らしさ：「引き寄せ」>「引き寄せ+移動」>「持ち上げ」>「保持」

「持つ」らしさ：「引き寄せ」=「保持」≥「持ち上げ」>>「引き寄せ+移動」

「取る」らしさ：「引き寄せ」>「引き寄せ+移動」≥「持ち上げ」>>「保持」

### 4.3 取得義について

まず取得義について検討する。本調査では取得義に相当する動作として「引き寄せ」と「持ち上げ」の2つのビデオを設定した。したがって、主にこの2つのビデオの分析を通して、取得義について考察していく。

取得義を表す動作として「引き寄せ」のほかに「持ち上げ」の動作を設定したのは、この2つの動作はいずれも物体を手中に収める点で共通するが、腕の動きの方向は異なっており、筆者は異なる意味を持つと考えたためである。

「引き寄せ」は腕が主體の側へ動き、「持ち上げ」は腕が上方向に動く。各々の動作はどのような意味を持つのだろうか。腕を自分の方向に引き寄せる「引き寄せ」の動作からは、物体を自己の領域内に収めようとする意志が窺える。一方、腕が上方向に動く「持ち上げ」の動作は重力（下方向）と逆方向への動作であり、重力に対する抵抗を表す。すなわち、「持ち上げ」はある場所に置いてある物体を置いていない状態にする動作を表し、「引き寄せ」にみられるような物体を自己の領域内に収めようとする意志はそこにはない。（中司 2019：12）

“拿”、「持つ」、「取る」のいずれの動詞についても「引き寄せ」のビデオが最も選ばれた<sup>10)</sup>。また、いずれの動詞についても「持ち上げ」のビデオはある程度選ばれている。

中司 2017<sup>11)</sup>、2019と比較して、本調査における“拿”、「取る」の「引き寄せ」のビデオの得点率が高いと言う結果に矛盾はない。“拿”、「取る」にとって「引き寄せ」、つまり物体を手中に収め、腕を自分の方向へ引き寄せる動作が典型動作であることが再確認された。“拿”、「取る」の中心的意味は物体を手中に収めるという取得義で、かつ物体を自己の領域内に収める意味を含み、その傾向はより「取る」で強いと考えられる。

次に、本調査において「持つ」について「引き寄せ」のビデオの得点率が高く、「持ち上げ」のビデオの得点率がやや下回ったのは、意外な結果であった。

なぜなら、中司 2017の動作産出調査では、「持つ」については腕を上方向に移動させる動作がもっとも多く行われたからである<sup>12)</sup>。

「持つ」における中司 2017の調査結果と本調査結果の乖離に對してどのような解釋が可能であろうか。

本調査において「持ち上げ」のビデオの得點率がそれほど伸びなかった理由として、調査時の條件——手の届く範囲における物體の有無および物體の位置が考えられる。

中司 2017の動作産出調査の際、インフォーマントの手の届く範囲に一切の物體は用意されていなかった<sup>13)</sup>。インフォーマントは動詞について思いついた動作を身體を用いて行い、その後、それが具體的になにを行った動作か、何を「持つ」動作だったか等を解答した。「持つ」についての調査では、インフォーマントによって目の前ではなく、より自分に近い位置、すなわち手元にある物體を（実際にはないが、あるものとして）手中に収めた後、腕を上方向に移動させる動作が多く行われた。動作の際に頭に浮かんだ物體としてカバン、本、箸、鉛筆などが挙げられた。またこのほかに、地面（目の前ではなく横）に置いてある物體を持ち上げる動作が多く行われた。この動作についてはカバンをとという回答が多くみられた。

一方、本調査では、動作者の手の届く範囲（棚らしきものの上）に物體が置かれていた<sup>14)</sup>。これはインフォーマントにビデオを評價してもらう際の動作としての自然さを考慮した結果であった。なぜなら、日常的には何も無いものを「持つ」ことはまずないからである。

本調査は、「持ち上げ」の動作として、「持つ」の動作産出調査で多く行われた物體を手中に収めたのち、腕を上方向に移動させる動作を設定したつもりであった。しかし、実際には物體が動作者の手元や地面ではなく前方に置かれていたため、はじめに腕を前方向に移動させるという本来必要なかった動作が加わってしまった。前方にある物體を腕を伸ばして手中に収めた後、腕を上方向に移動させる動作は相對的に行われることが少ない動作であると考えられる。おそらくより行われることが多いのは腕を自分の方へ引き寄せる動作であり、それはすなわち本調査が設定した「引き寄せ」の動作と一致する。これらのことが要因となり、「持ち上げ」のビデオはインフォーマントにあまり選ばれず、

逆に「引き寄せ」のビデオが選ばれたものと考えられる。

一方、中司 2017の動作産出調査において“拿”について物體を手に収めた後、腕が上方方向に移動する動作はあまり行われなかった（總動作數に占める割合は15.9%）。また、「取る」についてはほとんど行われなかった（同3.3%）。それにも関わらず、本調査において「持ち上げ」のビデオがある程度選ばれたのは、どのような理由によるものだろうか。

その主な理由として、本調査が2つのビデオを比較し、よりその動詞らしいものを選ぶという性質上、どちらかのビデオには必ず一定の得點が入ることが挙げられる。以下に、「持ち上げ」と「保持」のビデオの比較課題、および「持ち上げ」と「引き寄せ+移動」のビデオの比較課題の分析結果より説明していきたい。

まず、「取る」については、靜的な「保持」のビデオは他のどのビデオと比較した場合も得點率はゼロに近かった。日本語母語話者は「取る」について靜的な動作であるという認識が強いため、靜的な保持の動作に對しては「取る」らしさは認めにくかったものと考えられる。「持ち上げ」と「保持」のビデオを比較した課題においても、「保持」のビデオはほとんど選ばれておらず、その結果、「持ち上げ」のビデオの得點率が上がっている。

また、「持ち上げ」と「引き寄せ+移動」のビデオを比較した場合、その得點率はほぼ同率だった。「取る」が移動義を表すかについて詳細は「4.5 移動義について」で後述するが、「引き寄せ」と「引き寄せ+移動」のビデオの比較課題の結果を見ると、移動の要素が含まれるだけで「取る」らしさは低くなっている。つまり、「取る」らしさにおいて「引き寄せ」からはともに劣る「持ち上げ」と「引き寄せ+移動」のビデオを比較した結果、得點率が五分五分となっただけであり、インフォーマントが「持ち上げ」のビデオに「取る」らしさを積極的に認めたわけではないと考えられる。

中司 2017の動作産出調査において、物體を手中に収めた後、腕を上方方向に移動させる動作（本調査の「持ち上げ」はこれに相當するものとして設定した）はほぼ行われなかったことを併せて考えると、「持ち上げ」は「取る」が表す範圍の動作ではないと言えよう。ここから、「取る」は典型動作が「引き寄せ」で取得義が中心的意味であり、「持ち上げ」は「取る」が表す動作には含まれな

い<sup>15)</sup>。つまり、「取る」は常に物體を自己の領域に収めるという意味を表す。

以下では、“拿”について、「持ち上げ」のビデオが豫想より得点率を得た理由について考察する。

「取る」について日本語母語話者のインフォーマントが動的な動作であるという認識が強かったのとほぼ同じように、“拿”について中國語母語話者のインフォーマントは動的な動作であるという認識が強かった。そのため、「持ち上げ」は“拿”にとって典型動作ではないものの、動的であるという意味において静的な「保持」の動作と比べた場合、より“拿”らしさを感じたと考えられる。保持義については後述するが、「取る」は完全に動的で保持義を表さないのに対し、“拿”は静的な部分も持ち合わせ、「保持」のビデオにもある程度点数が入っている。そのため、「持ち上げ」のビデオの点数は低くなってはいる。しかし、中司 2017の動作産出調査において腕が上方向に移動する動作は少ないものの行われていることから（總動作数に占める割合は15.9%）、「持ち上げ」の動作は“拿”が表す範囲の動作であると考えられる。

ここから、“拿”は典型動作が物體を手中に収めた後、腕を引き寄せる動作で、取得義が中心的意味である。また、物體を手中に収めた後、腕が上方向に移動する動作も“拿”が表す動作である。すなわち、“拿”は基本的には物體を自己の領域に収めるという意味を表すが、「持ち上げ」のようにそうでないこともある。

以上より、“拿”と「取る」は、物體を手中に収め、その後それを引き寄せる動作が典型動作である点で共通する。すなわち取得義が中心的意味で、かつ物體を自己の領域に収めるという意志を持つ。その傾向はより「取る」で強いと考えられる。一方、物體を自己の領域内に収めようとする意志がない「持ち上げ」の動作は「取る」には含まれないが、“拿”には含まれると考えられる。「持つ」はデータを見る限り、取得義を表す。ただし、それが中心的意味か否かは保持義や移動義とともに検討する必要がある。これについては後述する<sup>16)</sup>。

#### 4.4 保持義について

本調査を通じて、“拿”、「持つ」、「取る」で最も顕著な違いがみられたのは「保持」のビデオの得点率である。

まず“拿”について「保持」のビデオの得点率は高くなかった。これは中司 2017、2019の結果と一致する。“拿”は動作動詞としての性質が強いことが伺え、動きのない静的な「保持」のビデオは選ばれにくかったと考えられる。ただし、中司 2019に引き継ぎ、本調査においても「保持」のビデオがまったく選ばれなかったわけではなく、一定の“拿”らしさが認められている。以上より、保持義は“拿”が表す周辺の意味であることが再確認された。

次に、「取る」については「保持」のビデオはほぼ選ばれなかった。この結果も中司 2017と一致する。「取る」は動的な動作を表し、保持義は表さない。

一方、「持つ」については、「保持」のビデオの得点率は「引き寄せ」とほぼ同率のトップであった。「引き寄せ」と「保持」のビデオの比較課題の結果を見てみても、やはり両者はほぼ同率であった。また、「保持」と「持ち上げ」のビデオの比較課題では、両者はほぼ同率であった。なお、「保持」と「引き寄せ+移動」のビデオを比較した課題においては、「保持」のビデオが完全に「持つ」らしいと評価されている。すなわち、本調査において「保持」のビデオは「持つ」らしさにおいて他のいずれのビデオにも劣っていない。

中司 2017の動作産出調査では、腕が動かずに物体を保持している動作が全体に占める割合は34.1%で一定程度行われたのに対し、物体を手中に収めた後、腕を自分の方向へ引き寄せる動作は13.6%であまり行われなかった。また、最も多く行われたのは、物体を手中に収めた後、腕を上方向に移動させる動作であった(50.0%)。

中司 2017の結果と比較して、本調査において「持つ」について「保持」のビデオが選ばれたのは理解できるが、「引き寄せ」のビデオについてはなぜこれほどまでに選ばれたのかという疑問が生まれる。その理由の一つとして、ビデオを評価するという性質上、映像としてより自然だと思われるものは「引き寄せ」のビデオであったということが考えられる。逆に言えば、「保持」のビデオは動きがないため、インフォーマントにはやや不自然な映像として捉えられたのではないだろうか。さらに、「引き寄せ」のビデオは、物体を手中に収め、腕を引き寄せて保持した動作までを含む。そのため、インフォーマントに保持の動作の一つとして認識された可能性がある。映像の比較という状況にも関わらず、動きのない静的な「保持」のビデオが選ばれたのは、やはり保持義

が強いことを示していると考えられる。したがって、本稿では「引き寄せ」が「持つ」の典型動作であるとは考えない。

もう一つ、中司 2017では物體を手中に収めた後、腕が上方向に移動する動作が最も多く行わたのに對し、本調査ではそれに対応する動作として設定した「持ち上げ」のビデオの得点率があまり伸びなかった。また、組み合わせ別の比較課題においても「持ち上げ」と「保持」のビデオはほぼ同率で、中司 2017とはやや異なる結果であった。これもやはり「4.3 取得義について」で述べたように、「持ち上げ」の動作として設定したのが相対的に行われることが少ない動作であったことに起因すると考えられる。本調査で用いた物體の位置が前方ではなく手元であったならば、「持ち上げ」のビデオはより「持つ」らしいと評価されていたと考えられる。しかしながら、「保持」のビデオも先に述べた通り映像としての自然さでは劣るため、本調査においては不利だった点では同じである。本調査の結果からは、「持つ」の典型動作が物體を手中に収めた後、腕が上方向に移動する動作であるか、それとも物體を保持する動作であるか、即ち中心的意味が取得義であるか保持義であるかははっきりとは分からないが、少なくとも中司 2017の結果と比較して矛盾しないと言えよう。

以上、本調査と中司 2017、2019の結果に對する考察を通して、保持義について以下のように結論する。「取る」は完全に動的で取得義を表すため、保持義を表さない。「持つ」は取得義を表す一方で、静的な保持義も表す。「拿」は周邊的意味として保持義を表す。ただし、中心的意味は取得義であることから、「拿」、「持つ」、「取る」を比較したとき、「拿」は「持つ」と「取る」の中間に位置するが、より「取る」に近いと言える。

#### 4.5 移動義について

“拿”について、「引き寄せ+移動」のビデオは一定の得点を獲得した。これは中司 2019の結果と一致する。また、「取る」についても一定の得点を獲得した。しかし、“拿”、「取る」のいずれも「引き寄せ」のビデオの得点には届かない。「引き寄せ+移動」と「引き寄せ」のビデオは取得の動作のあとに移動の動作を伴うか否かにおいてのみ異なる。

これは、“拿”、「取る」にとって「移動」という要素は必須ではないのみな

らず、むしろマイナス要素であることを意味する。「移動」は“拿”らしさ、「取る」らしさからは外れるもの、つまり“拿”、「取る」の典型動作には含まれない要素であると言えよう。移動義は“拿”、「取る」の中心的意味ではない。ただし、「引き寄せ」のビデオと比較した際、「引き寄せ+移動」のビデオも一定程度選ばれているため、「移動」の要素は“拿”らしさ、「取る」らしさを根本から否定するほどではなく、加わっても良いレベルである、言い換えれば“拿”、「取る」の意味を完全に損なうというほどではないことを意味する。すわなち、移動義は“拿”、「取る」の周邊の意味である。

一方、「持つ」について「引き寄せ+移動」のビデオは「持つ」らしさで著しく劣ると評価された。組み合わせ別の評価結果を見ても、「引き寄せ+移動」のビデオは他のどのビデオよりも選ばれていないだけでなく、得点率は限りなくゼロに近い。「持つ」の場合、移動の要素が加わると「持つ」らしさが否定される。つまり、移動の要素は「持つ」にとって餘計なもので、その意味を否定するほどのレベルであると言える。「持つ」は移動義を表さない。

以上より、“拿”、「取る」は周邊の意味として移動義を表す。それに對し、「持つ」は移動義を表さない。

## 5. まとめ

本稿では中心的意味および周邊の意味という觀點から“拿”、「持つ」、「取る」を比較するため、日中の複数の母語話者に調査を行い、4種類のビデオを見せて、よりその動詞らしいものはどれか評価するよう求めた。

その結果、“拿”と「取る」の典型動作は物體を手中に収めた後、引き寄せる動作であり、取得義が中心的意味である點で共通する。両者はともに物體を自己の領域に収めるという意味を表す。また、“拿”と「取る」は周邊の意味として移動義を表す點においても共通する。一方、「取る」が完全に動的で保持義を表さないのに對し、“拿”は靜的な要素も持ち合わせ、周邊の意味として保持義を表す。これらに對し、「持つ」は取得義および保持義を表す。ただし、その取得義については基本的に物體を自己の領域内に収めようとする意志は關わらない。この點において“拿”と「取る」とは異なる。また、「持つ」は移動義を表さない點においても“拿”と「取る」とは異なる。以上より、

“拿”は「持つ」が表すような物體を自己の領域内に収めようとする意志は關わらない取得義および保持義を周邊の意味として表すが、中心的意味から言う  
と、より「取る」に近い。

本稿は、ビデオを用いた手法によって動詞が表す動作の形を明らかにすること  
で動詞の意味を明確にし、異なる言語間で比較することが可能になったと考  
えられる。

## 注)

- 1) 中國語母語話者のインフォーマントの出身地は以下の通りである（C1、C2など  
はインフォーマントの識別IDを表す）。C1：遼寧省瀋陽市、C2：遼寧省大連市、  
C3：天津市、C4：河南省鞏義市、C5：天津市、C6：河北省承德市、C7：山東省荷  
澤市、C8：山西省霍州市、C9：黒龍江省チチハル市、C10：河南省鞏義市、C11：  
黒龍江省チチハル市、C12：山東省烟臺市、C13：黒龍江省ハルビン市、C14：河  
南省駐馬店市、C15：遼寧省大連市、C16：吉林省白山市、C17：廣東省廣州市、  
C18：山東省萊州市、C19：河南省商丘市、C20：廣東省佛山市、C21：黒龍江省ハ  
ルビン市、C22：福建省福清市、C23：上海市、C24：黒龍江省、C25：甘肅省嘉峪  
關市、C26：黒龍江省ハルビン市、C27：廣西省南寧市、C28：内モンゴル自治區包  
頭市、C29：北京市、C30：河南省洛陽市、C31：甘肅省蘭州市、C32：遼寧省瀋陽  
市、C33：廣東省東莞市、C34：新疆ウイグル自治區ウルムチ市。調査當時の平均  
年齢は、27.8歳（20～43歳）である。ただし、一名については年齢不明。
- 2) 「持つ」と「取る」のインフォーマントは同一人物である。日本語母語話者のイン  
フォーマントの出身地は以下の通りである。J1：神奈川県藤澤市、J2：埼玉縣朝霞  
市、J3：東京都練馬區、J4：埼玉縣朝霞市、J5：埼玉縣朝霞市、J6：香川縣丸龜市、  
J7：大阪府大阪市、J8：石川縣金澤市、J9：茨城縣稻敷郡、J10：神奈川県横濱市、  
J11：茨城縣高萩市、J12：福岡縣北九州市、J13：埼玉縣朝霞市、J14：福岡縣築上  
郡、J15：静岡縣静岡市、J16：岐阜縣大垣市、J17：千葉縣浦安市、J18：福岡縣北九  
州市、J19：廣島縣廣島市、J20：神奈川県平塚市、J21：福岡縣遠賀郡、J22：栃木縣  
宇都宮市、J23：東京都墨田區、J24：福岡縣北九州市、J25：東京都調布市、J26：不  
明、J27：埼玉縣草加市、J28：千葉縣千葉市、J29：千葉縣我孫子市、J30：茨城縣鹿  
嶋市、J31：千葉縣白井市、J32：東京都葛飾區、J33：東京都江戸川區、J34：千葉縣  
千葉市。調査當時の平均年齢は27.9歳（18～65歳）である。
- 3) 移動義に相當するビデオとして「引き寄せ+移動」のビデオを設定したが、それは  
“拿”、「持つ」、「取る」において取得の動作を伴わない移動のみの動作は考えられ  
ない、つまり、物體を手中に収めた状態で移動するためには必ず取得の動作が前提  
となるからである。

- 4) これは假に本調査で物體を一つだけ設定し、その物體がインフォーマントの日常生活などにおいて4つの動作(引き寄せ、持ち上げ、保持、引き寄せ+移動)のうちの特定の動作としばしば組み合わせるものであった場合(もしくはその逆の場合)、本調査における「らしさ」の評価に影響が及ぶ可能性を否定できないためである。
- 5) 「取る」の調査においては、指示文の「持つ」の箇所が「取る」に変わる。
- 6) 組み合わせの詳細は、「引き寄せ」と「持ち上げ」のビデオの比較、「引き寄せ」と「保持」のビデオの比較、「引き寄せ」と「引き寄せ+移動」のビデオの比較、「持ち上げ」と「保持」のビデオの比較、「持ち上げ」と「引き寄せ+移動」のビデオの比較、「保持」と「引き寄せ+移動」のビデオの比較である。
- 7) 参考までに物體(大・中・小)別の得點率を述べると以下のごとくである。ここでいう得點率とは、物體別の各ビデオ(1. 引き寄せ、2. 持ち上げ、3. 保持、4. 引き寄せ+移動)の最高點18點を100%とし、點數をパーセンテージに換算したものである。「拿」: 1. 引き寄せ(大70.9%・中69.0%・小70.6%)、2. 持ち上げ(大39.5%・中47.4%・小47.7%)、3. 保持(大31.9%・中27.0%・小27.1%)、4. 引き寄せ+移動(大57.7%・中56.7%・小54.6%)。「持つ」: 1. 引き寄せ(大73.2%・中67.0%・小64.5%)、2. 持ち上げ(大54.1%・中62.7%・小63.9%)、3. 保持(大65.0%・中64.4%・小64.2%)、4. 引き寄せ+移動(大7.7%・中5.9%・小7.4%)。「取る」: 1. 引き寄せ(大82.8%・中81.5%・小80.1%)、2. 持ち上げ(大44.8%・中55.1%・小59.5%)、3. 保持(大7.7%・中5.7%・小4.1%)、4. 引き寄せ+移動(大64.7%・中57.7%・小56.4%)。
- 8) 中司 2019における“拿”の分析結果(分析對象のインフォーマントは合計19名)は以下の通りである。「引き寄せ」のビデオ:得點率71.7%(平均點39點)、「持ち上げ」のビデオ:得點率48.2%(平均點26點)、「保持」のビデオ:得點率26.6%(平均點14點)、「引き寄せ+移動」のビデオ:得點率は53.4%(平均點29點)。
- 9) したがって、以下“拿”については中司 2019の分析・考察と重複する記述がある。
- 10) ただし、「持つ」については「保持」のビデオも「引き寄せ」のビデオとほぼ同率選ばれている。
- 11) 中司 2017では、“拿”と「取る」については、物體を手中に収めたのち、腕を自分のほうへ引き寄せる動作が最も多く行われた。なお、中司 2017はインフォーマントによって行われた動作を分析するにあたって、腕の移動方向として上向き、下向き、内向き、外向き、前向き、後ろ向き、移動なしの7つを設定した。本稿の「持ち上げ」の動作は中司 2017の上向きの動作に相當し、本稿の「引き寄せ」の動作は中司 2017の後向きの動作に相當する。さらに、本稿の「保持」の動作は中司 2017の腕の移動なしに相當する。中司 2017で“拿”と「取る」について行われた動作の腕の移動方向は以下の通りである。“拿”: 上向き15.9%、下向き0.0%、内向き4.3%、外向き2.9%、前向き5.8%、後ろ向き49.3%、移動なし21.7%。「取る」: 上向き3.3%、下向き3.3%、内向き3.3%、外向き0.0%、前向き0.0%、後ろ向き86.7%、移動なし

3.3%。

- 12) 中司 2017の動作産出調査において「持つ」について行われた動作の腕の移動方向は以下の通りである。「持つ」：上向き50.0%、下向き0.0%、内向き2.3%、外向き0.0%、前向き0.0%、後ろ向き13.6%、移動なし34.1%。
- 13) このような方法を採用したのは、あえて物體を用意しないことで状況を限定せず、動詞についてインフォーマントが頭の中に想起した動作を確認したかったためである。調査の詳細は中司 2017を参照されたい。
- 14) ただし、「保持」のビデオを除く。
- 15) 例えば地面にある物體を身をかがめて手中に収め、その後腕を上方向に移動させて胸元に寄せる動作などは「取る」で言い表されるだろう。だがそれは物體を自己の領域に収めるといふ意志がある点で、本稿のいうところの「持ち上げ」とは別の動作である。
- 16) 本調査では「持ち上げ」のビデオの設定に再検討を要する餘地があった。「持つ」の典型動作はやはり物體を手中に収め、腕を上方向に移動させる動作であると考えられるものの、今後、改良した「持ち上げ」のビデオを用いた調査を行い、再検討したい。

#### 参考文献

- 荒川清秀 2017. 「續やっぱり辭書が好き 辭書の記述をめぐって 第一一六回 “拿”の意味」, 『東方』431号: 20-21頁。
- 遠藤雅裕 2001. 「中國語動作動詞“拿”の多義の構造」, 『中央大學論集』第22号: 29-44頁。
- 遠藤雅裕 1997. 「中國語動作動詞のネットワークー「持つ」類“拿”系を中心に」, 『早稻田大學大学院文學研究科紀要』42(2): 165-176頁。
- 中司梢 2019. 「“拿”とは何かービデオ評価による“拿”の中心的・周邊的意味」, 『中國文學研究第四十五期』: 1-20頁。
- 中司梢 2017. 「基于影像分析的動作動詞“拿”的语义研究——与「持つ」的对比分析」, 『中國語文法研究2017年卷』: 76-91頁。
- 中司梢 2016. 『手に關わる中國語動作動詞の意味研究』, 早稻田大學大学院文學學術院, 博士學位論文。
- 森宏子・宮畑一範 2008. 「中國語動作動詞の研究 拿」, 『中國學志』 剝 (23): 61-84頁。

#### 謝辭

本調査に御協力いただいた皆々様に深く感謝いたします。

本研究はJSPS科研費19K23081 「「モツ」動作を表す中國語動詞に對するビデオを用いた意味研究」の助成を受けたものの一部である。

\* \*

作者：中司 梢

Author：NAKATSUKA Kozue

標 題：基于录像评价的汉日对比研究——“拿”与「持つ」、「取る」——

Title：A Comparative Study on Japanese and Chinese Action Verbs Based on the Analysis of Video Recognition: Japanese “motsu” “toru” and Chinese “na”

摘 要：本文对汉语动作动词“拿”和日语的「持つ」、「取る」进行了语义对比考察。我们以汉日母语者作为调查对象，要求被调查者看到四个动作的录像后，判断哪个录像动作更像“拿”、「持つ」、「取る」。通过此调查，我们得出了以下结论：“拿”和「取る」的核心意义是“取得”，其意倾向于将某物移动到自己的范围内。“搬动”则是“拿”和「取る」的边缘意义。而“拿”也可表示不包含将某物移动到自己范围内的意思的“取得”义和“持有”义（作为边缘意义），「取る」则不可。「持つ」表示“取得”义和“持有”义，但其表示的“取得”义通常不包含将某物移动到自己的范围内，这跟“拿”和「取る」不同。另，「持つ」不表示“搬动”义。虽然“拿”作为边缘意义也能表示不包含将某物移动到自己范围内的意思的“取得”义和“持有”义，就其表示的核心意义而言，“拿”更近于「取る」。

关键词：汉日对比 动作动词 录像评价 拿 持つ 取る